

レベッカ・マック著

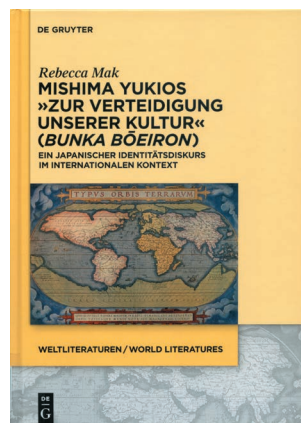
『三島由紀夫の「文化防衛論」——国際的文脈から見た日本のアイデンティティをめぐる一議論』

Rebecca Mak, *Mishima Yukios »Zur Verteidigung unserer Kultur« (Bunka Bōei ron): ein japanischer Identitätsdiskurs im internationalen Kontext.* Weltliteraturen Berlin: De Gruyter, 2014.

ジャネット・ウオーカー

本書は二〇一一年にベルリン自由大学のフリードリヒ・シュレーゲル文学研究大学院(FSSG)で最終審査を通過したレベッカ・マック博士の論文に手を加えたものである。ベルリン自由大学はドイツの大型助成プログラム「エクセレンス・イニシアティブ」の一環として生まれた総合大学だが、学内の数ある施設のなかでもFSSGは全世界の文学が一堂に会していることに加え、複数分野(本書の場合は日本研究と比較文学)の教官が学生をきめ細かく指導してくれるユニークな研究教育機関として知られている。本書の第六章(pp.191-227)には三島由紀夫の「文化防衛論」(一九六八)の西洋言語による初の翻訳が収録された(抄訳は、一九七三年にフランスの『エスプリ Esprit』誌に掲載されている)。こ

の翻訳は全編とおして丁寧な注がつけられているほか、本書の脚注には日本および日本以外の文学運動や文学ジャンルに関する情報、日本、ロシア、アメリカ、朝鮮、中国の歴史的な政治運動や同時代の政治状況、また三島本人が定義した用語や概念の説明など、この難しい作品を読み解くのに必要な情報が文脈に則して解説されている。「文化防衛論」は一九七〇年に三島が自死する二年前に書かれ、戦後日本の文化アイデンティティに対する三島の最終的な論評、および日本を国家として文化としていかに再生させるかに関する三島の見解が書き記されている。本書の大半を占めるのはこの作品についての知的に透徹した分析である。三島の政治観と政治理念がごく端的に吐露されたこの重要文献の翻訳なら



びにその分析と文脈づけを通じて、本書は政治文化思想家としての三島の研究にとつて、きわめて独創的かつ重要な貢献をするこ
とになった。

著者は作品と人生のできごとを関連づける伝記的手法とは一歩距離を置き、より大きな文学的、歴史的、政治的文脈の枠組みに従つて「文化防衛論」を論じているが、これは三島自身が設定したのと同じ文脈である。本書はまず一九七〇年の三島の死後における研究状況を簡単に述べたのち、文献としての「文化防衛論」を丹念に読み、その言語的特色、論理構成、修辞法を分析していく。おもしろいのは、この作品が日本で長い伝統のある「随筆」あるいは「評論」という様式の類型を示しているという指摘だ。随筆（評論）は「多くの事例の助けを借りて、直感的に」読者を理解に導き、合理性や論理ではなく文学性を基盤に作品の活力を得ていく様式である（p.39）。内容的には、「自民族中心的で、日本文化の独自性にこだわり、とりわけ西洋との違いを強調する日本人論」というジャンルに属する（pp.39-40, 185）。次いで本書は、三島の哲学・文学様式が抱える翻訳にとつての困難さを指摘し、最後に「文化防衛論」を日本文化の特質、民族主義と国際主義、および文化概念としての天皇という論点で文脈づけていく。こうした議論は近世以来、三島が「文化防衛論」を書いた時点までに確定されてきたものだが、なかでも瞠目すべきところとして、第一

に明治以来発展してきた「民」および「民族」という言葉のさまざまな意味に関するつつこんだ議論、およびこの概念に関する三島の解釈と（p.67-78）、第二に文化概念としての天皇と天皇制の進展についての分析をあげたい（p.81-103）。著者はさらに「文化防衛論」が目下進行中の日本のアイデンティティ探しに大きな貢献をしたとしたうえで、この作品と和辻哲郎、津田左右吉、佐々木宗一、丸山眞男など重要な文化人による先行「日本人論」や政治社会論との相互作用について検討している。「文化防衛論」には、『源氏物語』のような歴史的文学生作品、『増鏡』のような初期の歴史書、正岡子規の俳句、西洋のマルクス主義や非マルクス主義文献のほか、さまざまな文化・文芸理論など、多岐にわたる文献がとりとめもなく登場するが、それらへの三島の対応のしかたが分析されている点もおもしろい。著者にとつて「文化防衛論」は、文化をまたぐ近代論と日本特殊説のあいだのどこかに位置するととらえるべきものだろうか。

本書は、日本が第二次世界大戦の軍事的敗北とアメリカによる占領を経て、戦後どのようにおのれの国家的・文化的アイデンティティの確立を試みたかという文脈において「文化防衛論」を辿っていく。三島はこのなかで、戦後日本文化の利己主義、頹廢、物質主義とみなしたものに對して、激しく反応する。こうしたものによつて超越的価値と個人とのつながりが失われてしまった。

だからこそ戦後日本文化は守られる必要があり、しかもそれができるのは「おのれの利己主義を拒否するのみならず私的安寧の希求をも捨てる覚悟のある国民」だけである(75頁)。重要なのは、「文化防衛論」が戦後日本の精神的心地悪さへの診断書だっただけでなく、三島が日本文化の神聖不可侵性としたものを守る行動への呼びかけでもあったことだ。三島が懸命に武士道精神をよみがえらせようとしたのはそのためだが、これは一九〇〇年に英語で出された新渡戸稲造の『武士道』においてすでに再評価され、欧米的価値観の侵略に対する日本文化防衛の理念へと変貌している。三島は「アナクロな武士道精神を現在に活かす。守ることは行動することであるから、常に肉体を鍛えねばならぬ」と言った(65頁)。そして「武士道の理想を生き、日本のために命を捧げるよう備えよと日本人に呼びかけた」のである(71頁)。日本人が守るべき日本文化の神聖不可侵性は天皇陛下のお姿のなかにあると三島は言う。それはアメリカ占領軍に宣言を強いられた人間天皇ではなく、また一九四五年以後の戦後文化によって卑俗化された天皇像でもなく(p.139)、個人の自己犠牲にふさわしい神々しいお姿のことだ。三島は天皇を「倫理の頂点であると同時に(戦後日本にとって)尽きることのない道徳の根源である」と描いた(p.178)。著者はまた、三島がある興味深い異文化介入をおこなったことを指摘する。三島は真の日本の価値をしっかりと定義したいがために、アメリカ人

人類学者ルース・ベネディクトが一九四六年の著書『菊と刀』(邦訳は一九四八年)で用いたオリエンタリズムの香りがする日本文化論を援用した。ベネディクトの研究は戦時中アメリカ政府のために行なわれたものであり、日米が敵国である状況において、この二つの連環の危険性が提言されたのだが、三島はそれを換骨奪胎して、天皇に仕えるための芸術(菊)と行動(刀)の統合という戦後の再生理念に置き換えた。

第四章では、三島の死の前後における「文化防衛論」への反応がいくつか分析されている。それぞれ歴史的、政治的に大きく異なる文脈から生まれた反応だが、そこから三島の思想と日本文化の関連性が持続していること、また三島をさまざまに異なる枠組みでとらえることが可能だということがわかる。比較近代論とポストコロニアル文学を研究している評者にとって本書の最も魅力的な点は、近代に対する文化的反映という伝統のなかに「文化防衛論」を位置づけたことである。この伝統は二十世紀初頭から日本とヨーロッパで発展し、日欧で違う現れ方をしたが、著者によれば、これは概して近代化および近代に対する保守派からの反応や応答であり、たとえば個人と社会とのつながりやその意味の喪失など、近代のマイナス面についての全体像を描こうとする論文がその典型である。三島最後の二年間に書かれた文化批評のうち最も重要とされる「文化防衛論」で三島が試みたことは、必ずし

も誰かからの影響と特定はできないものの、ニーチェからトーマス・マン（『非政治的人間の考察』一九一八）、ガブリエル・ダヌンツィオ、シュテファン・ゲオルゲなどのヨーロッパの近代文化批判に匹敵すると著者は考え、さらに、こうしたヨーロッパの作家全員にとつて、文化批評は「統一形成の神話に埋めこまれた」真の「文化の追求」に動機づけられているとする（p.149）。であれば、フィクション作品のなかでマンなどヨーロッパ作家への賛美や親しみを隠さない三島は、「越境する」近代という文脈に——フィクション作家であると同時に文化評論家として——当然、位置づけられるべきである。

近代日本文化をめぐる三島の思想は、京都学派などの先人世代による日本文化批評や、浪漫派の作家や評論家の作品のほか、第二次大戦前夜の国粹主義的雰囲気のほか、一九四二年に開かれた「近代の超克」会議の参加者などの影響によつて形成されたと著者は結論づける。一九三〇年代の小林秀雄は、西洋と日本の要素を併せもつ近代の雑種文化のなかで日本がいかにして近代的でありつつ日本のアイデンティティを保ちつつづけるかという問題に直面したが、これは三島の問題でもあった。ただし三島は「文化防衛論」のなかで、軍事的敗北とアメリカによる占領によつてとりわけ難しい状況にあった日本の戦後に対して処方を示した。この重要な文化評論において三島は、歴史的な大変動直後の混沌に放りこ

まれて変化しつづける「文化、伝統、天皇制、国家」（p.177）の關係に正面から立ち向かうという偉業をなすとげたと著者は言う。本書は作家三島由紀夫に関する現行の議論のみならず、現在の世界において戦後日本文化がどのような意味と機能をもつかについての再評価にも大きく貢献している。

（朝倉和子 訳）